

自宅でのがん治療期副作用管理と栄養摂取サポート事業 ～患者およびその家族の不安と負担を軽減～

採択事業者名

株式会社DeaLive

コンソーシアム構成員

四国がんセンター | ワンダーソフト株式会社 | 大手生命保険会社 | 大手製薬会社 |

勉強会の実施概要

コンソ内部のみ	含む外部
実施回数の累計 12	実施回数の累計 3
参加人数の ユニーク累計 36	参加人数の ユニーク累計 51

代表的な実施事例

狙いとゴール	がん患者の食事・栄養課題をキー・オピニオン・リーダー達が県内医療者に講演することで、課題意識を向上させ、合わせて本事業の進捗と成果を共有することで、アプリケーションへの興味関心を高め、横展開する医療機関を増やす
実施の成果	医師、管理栄養士、看護師など全8職種が参加、がん患者の参加もあった。終了後アンケートでは「期待通りだった」が73%で「期待外れだった」という回答はなかった。また、92%が本事業に「興味がある」という回答をした。全体の52%の連絡先登録があった。
実施アジェンダ 協議内容	日本がんサポーターブケア学会副理事長の青儀先生が勉強会主旨と本事業の概要を説明し、その後、各演者ががん化学療法中の食事栄養に関する問題、管理栄養士から見た課題感、運動の重要性について講演、都度、活発な質疑を行い、今後の展開について意見交換した
参加者の一例	医師12名、看護師10名、薬剤師4名、管理栄養士12名などが参加。施設では四国がんセンター、愛媛大学病院、松山市民病院、松山日赤病院、県中央病院、済生会松山病院、市立宇和島病院。近隣クリニックや薬局からの参加があり、関心の高さが伺えた
次年度以降の 想定アクション	外部向け勉強会は年1回以上実施①医療職むけ勉強会のほか、がん患者向け、一般市民向け講座も実施②実装施設の拡大(四国がんセンター→県中央病院や市立宇和島病院、HITO病院など)を通じてユーザーの拡大を図る。③患者会に勉強会を通じてアプローチする



データ活用・協議の具体例

重要指標例	データ活用・協議の具体例	
	・患者の日々の記録およびオンラインカウンセリングによる更なるQOL改善 ・データを活用したオンラインカウンセリングの満足度	
	実装前	実装後
	データ取得 ・患者の日々の食事、自覚症状の記録なし (まれに紙に残して記録)	・アプリケーションによる記録実施 (約93%の日々記録率を実現)
	データ活用 ・病院通院時に持参	・患者課題把握によるカウンセリング事前計画 ・アプリによるタイムリーな面談提案 ・課題発生時のエスカレーション動線競技
	実行 ・診療時に短時間で相談(3週間に1回程度)	・アプリによるオンライン面談(週1程度) ↳オンライン接続率 100% ↳患者満足度CSI 94ptを実現 ・記録、面談データ分析とデータベース化
	業務反映 ・疑問点などは相談し切れずに帰宅	・アプリ利用によるQOL改善効果まとめ ↳学会発表準備 ・データベース活用による新事業検討 (製薬会社、生命保険会社) ↳新価値想像のための協業契約

代表的な実施事例

- <患者側行動変容>
- ・日々のアプリによる記録およびカウンセリングによるQOLのポジティブな変化
 - ・60代以上の患者においても、オンラインカウンセリングを実施可能(全員が初めての体験)
- <栄養士側行動変容>
- ・場所や時間の自由度が高い働き方を実現(四国中央市からの面談やフレキシブルな時間設定)
 - ・日々の入力データからのフォローアップ提案の実行
- <医療者の受けとめ>
- ・QOL改善効果の学会発表準備 がん連携協議会などでの展開